

みの苦しみでした。痛みのために疲労困憊です。その後しばらく再発防止のため、猪苓湯エキス剤と大建中湯エキス剤を寝る前に服用しています。この痛みはもうこりこりです。



当院から20分ほど、水戸街道を北に遡ると、鰻の旗の並ぶ牛久沼です。昔、沼の渡し場の掛け茶屋で鰻を注文し、「船が出るよー」の声に、慌ててどんぶり飯の上に鰻を乗せ、蒲焼の皿で蓋をして向こう岸に着いてから食べたところ、鰻がほどよく蒸され柔らかく、ご飯にはタレが染み込み、あまりのうまさから「うな丼」ができたと伝えられる発祥の地です。蒸し暑い季節です。蒲焼きの匂いを求めて、今夜は鰻街道へ「食養生」に出掛けます。

14

線維筋痛症候群

六十代、女性

「嬉しくって、報告にきました」

色白で小太りのT子さんが、満面の笑顔でやってきました。六十代前半のT子さんは、五年ほど前からいつも身体のどこかしらが痛くて、関節リウマチと診断され治療を受けていました。しかし今日は、長期ステロイド内服の影響で丸いおむすび形の顔（ムーンフェイス）はそのままですが、頬が緩み白い歯がこぼれ落ちそうです。

「先日、リウマチ科の先生に、『もう来院しなくてもよいですよ』と言われました。治るなんてことがあるんですね」

三年前に漢方薬を服用し始めてから痛みがずっと軽くなってきて、それまで服用していたプレドニン[®]や鎮痛剤を次第に減量し、一年前からはそれらをすべて中止しましたが症状の悪化はみられず、漢方薬のみで経過観察していました。その結果、西洋医学的な治療はもう必要なしと判断されました。幸いにも一時発生したステロイド内服による骨密度の減少も、先日の検査では正常に戻っていました。当院に来院した頃は体中の筋肉が痛み、特に両下肢や肩の痛みがひどくて、階段の昇降も辛く、朝方は手がこわばり、水道の蛇口を捻るのも大変でした。しかも痛みは身体のあちこちにあって広範囲です。T子さんはそれらの症状に加えて血液検査でリウマチ因子が陽性だったことから、当初、関節リウマチ（RA）と診断されて治療を受けていましたが、ステロイド剤にあまり反応せず、次第に増量しても顕著な治

療効果が上がらなかつたうえに、むしろ服用薬の副反応（ステロイドによる骨量の減少、鎮痛剤による胃腸障害、安定剤と抗うつ剤による全身のだるさと筋肉の脱力）に悩まされ、漢方治療の併用を求めて来院したのです。しかし線維筋痛症候群（fibromyalgia syndrome：FMS）に対しての認識が高まるにつれ、T子さんの診断もRAからFMSに変更されました。またステロイドによる骨量の急激な減少を併発したこともあって、ステロイド投与は完全に中止されました。これまで原因不明とされた頸椎痛や背筋痛病の中にも高い確率でFMSであるケースがあるといわれています。私も三年前はFMSの認識が薄く、RAと考えていました。

舌淡、歯痕あり、表面水滑、脈やや沈弦、皮膚は柔らかく浮腫状、二便正常、若い頃から冷え性で汗をかきやすい体質です。「少陰病、身体痛、手足寒、骨節痛、脈沈者、附子湯主之」（『傷寒論』）の条文を思い出しました。少陰病の陽虚寒湿証と考え、附子湯ぶしよとうを使ってみることにしました。

〔茯苓四ツムラ、芍薬四ツムラ、白朮五ツムラ、人参三ツムラ、炮附子二ツムラ〕二週間分ずつです。

服用し始めてから、次第に痛みが和らぎ、脚の上げ下げが楽にできるようになりました。確かな手応えです。しかし完全な満足を得られません。

FMSは、アメリカリウマチ学会（ACR）の分類基準では、「①広範囲な筋骨格疼痛、②特徴的な指圧点十八カ所のうち十一カ所に疼痛を認める」といった症状があり、ほかにも朝方の手のこわばりなどが多くみられたり、抗核抗体やリウマチ因子が陽性の例があったりするため、しばしば関節リウマチと診断され治療を受けている例が少なくありませんでしたが、近年になって関節リウマチとは別個の病態であると認識されるようになりました。確かにFMSの中にRA、SSc（シェーグレン症候群）、

SLE、強皮症などの結合組織病を合併している例が多く、免疫疾患であるとの可能性もいわれています。また多発する疼痛に加え、絶えず疲労感があったり、不眠・生理不順・乾燥症状、さらに精神症状として抑うつ・焦燥・不安などを伴う場合も多く、慢性疲労症候群（CFS）との重複率が高く症状にかなりの類似性があるとも指摘されています。

その結果、SSRIなどの抗うつ薬が有効という報告や、生体のエネルギー産生に問題があり、ミトコンドリアレベルの治療が有効であると主張して、補酵素（コエンザイム）や微量元素を薦める人たちもいます。しかし現在のところは、まだ原因の探求が必要な段階といえます。

T子さんは附子湯のおかげで、身体の各部位の痛みはかなり軽減されましたが、まだ寒い日には手や肘膝のこわばり・痛みが残り、完全治癒にいたりません。またときに、ひどい疲労感を覚えると訴えます。そこで補気通陽の「黄耆・桂枝」、補血活血止痛の「当帰・川芎」の薬対を附子湯に加え、もう一段体力気力の向上と止痛にまで働きを広げてみました。附子湯合当帰・川芎・黄耆・桂枝〔茯苓四ツムラ、芍薬四ツムラ、白朮五ツムラ、人参三ツムラ、炮附子二ツムラ、当帰四ツムラ、川芎四ツムラ、黄耆三ツムラ、桂枝三ツムラ〕二週間分ずつ継続です。

次第に効果が現れ、見違えるほど症状の改善が進みました。重い疲労感もなくなり、筋骨の疼痛もきわめて軽くなりました。附子湯単独よりも効果が顕著です。治療法に「接軌方」「変通方」という方法があります。列車の軌道に喩え、経方方剤に生薬や時方方剤を重ねることで、効果をさらに先へ広げる方法です。それから約十カ月後、ついに「完治しました」という嬉しいT子さんの報告を受けました。今でもときどき、T子さんはこの煎じ薬を求めて来院しますが、痛みや疲労を強く訴えることはもうありません。